

No.79 contents

- 2 第106回二科展 総括
- 3 〈絵画〉一人一人の作品を大切に—第106回二科展 絵画部展示について
- 4 〈絵画〉第106回二科展 審査・会場評 〈絵画・彫刻〉第106回二科展 受賞者
- 5 〈絵画〉第106回二科展 受賞作品—制作の視点
- 6 〈絵画〉作品寸評—第106回展 受賞作品から
- 8 〈絵画〉新会員紹介
- 9 〈彫刻〉総評
- 10 〈彫刻〉第106回二科展 受賞作品—制作の視点
- 11 〈彫刻〉受賞作品寸評 新会員紹介
- 12 event memo
- 13 彫刻部チャリティー「アートの芽を育てる新たな取組み」
二科ショップ・チャリティー報告
- 14 第106回二科展 巡回展スケジュール 地域展 二科展出品者支援
地域展の役割—関西二科展
- 15 2023リニューアル春季展への誘い 2023春季二科展 選抜出品予定者
- 16 計報 帝国ホテル二科サロン 事務局だより 編集後記



秋季

発行人：生方 純一 発行：公益社団法人 二科会
<https://www.nika.or.jp/> TEL：03-3354-6646
 E-mail：nika@nika.or.jp



106TH NIKA ART EXHIBITION 2022

第106回展は入場者や出品者も増え盛會裏に終了し、光明の見える二科展となりました。展覧会部は本展と春季展と委員がそれぞれに特徴を持った展示に取り組み体制を取っています。また関東地区以外の会員も展示委員に加わり全国的な視野に立った展示を目指しています。開催前の委員会において106回展の展示は伝統を継承しつつ選挙制度の改革による新体制を象徴する新鮮味のある展示を志向するため次のような具体的展示プランを立て、可能な限り実施しました。

- ① 1室は新役員、大臣賞受賞者等を中心に展示するが例年通りの定位置にせず、既視感のない新鮮な配列にする。
- ② 2室を倍の広さにして新役員、運営委員等の大作を中心に1室同様のスケール感。
- ③ 一部屋一部屋を広くして引きが取れ会員の大作が引き立つようにパネリング

- ④ 12室には会員、会員推薦者、会友優作を一同に展示し、新しい息吹を演出。
- ⑤ 13室は二科ショップが休憩室に移転し広くなり会員賞受賞作と会員大作を展示し伝統の九室会のような現代性を感じさせる部屋にした。
- ⑥ 14・15室は会友賞等会友2点入選中心に、彫刻部と融合できる作品を選抜。

承、特選も一堂に展示し受賞作をさらにアピール。② 12室の新人奨励室は継承。③ 新たな試みとして4、9室に初入選優作を展示、新たな出品奨励策とした。また18室に50号サイズの部屋を設置。今後を見据え、サイズに関わらず小品でも密度のある作品は優遇し、奨励していくことの視覚化を図った。



絵画部 1階 第2室

絵画部 3階 第12室(U35奨励室)

絵画部 3階 第12室(U35奨励室)

絵画部 1階 第15室

絵画部 2階 第1室

会場入口

第106回展は入場者や出品者も増え盛會裏に終了し、光明の見える二科展となりました。展覧会部は本展と春季展と委員がそれぞれに特徴を持った展示に取り組み体制を取っています。また関東地区以外の会員も展示委員に加わり全国的な視野に立った展示を目指しています。開催前の委員会において106回展の展示は伝統を継承しつつ選挙制度の改革による新体制を象徴する新鮮味のある展示を志向するため次のような具体的展示プランを立て、可能な限り実施しました。

- ① 1室は新役員、大臣賞受賞者等を中心に展示するが例年通りの定位置にせず、既視感のない新鮮な配列にする。
- ② 2室を倍の広さにして新役員、運営委員等の大作を中心に1室同様のスケール感。
- ③ 一部屋一部屋を広くして引きが取れ会員の大作が引き立つようにパネリング

- ④ 12室には会員、会員推薦者、会友優作を一同に展示し、新しい息吹を演出。
- ⑤ 13室は二科ショップが休憩室に移転し広くなり会員賞受賞作と会員大作を展示し伝統の九室会のような現代性を感じさせる部屋にした。
- ⑥ 14・15室は会友賞等会友2点入選中心に、彫刻部と融合できる作品を選抜。

承、特選も一堂に展示し受賞作をさらにアピール。② 12室の新人奨励室は継承。③ 新たな試みとして4、9室に初入選優作を展示、新たな出品奨励策とした。また18室に50号サイズの部屋を設置。今後を見据え、サイズに関わらず小品でも密度のある作品は優遇し、奨励していくことの視覚化を図った。



絵画部 1階 第15室

絵画部 2階 第1室

会場入口

一人一人の作品を大切に ——第106回二科展 絵画部展示について

山中宣明

第106回展は入場者や出品者も増え盛會裏に終了し、光明の見える二科展となりました。展覧会部は本展と春季展と委員がそれぞれに特徴を持った展示に取り組み体制を取っています。また関東地区以外の会員も展示委員に加わり全国的な視野に立った展示を目指しています。開催前の委員会において106回展の展示は伝統を継承しつつ選挙制度の改革による新体制を象徴する新鮮味のある展示を志向するため次のような具体的展示プランを立て、可能な限り実施しました。

第106回二科展はコロナ禍も治まらず、世情不安の中で周到な準備を重ねて予定通りに開催することができました。天候も不順で異常な暑さの続く時期でもありましたが、絵画部・彫刻部ともに出品者が増え、関係者は大いに安堵いたしました。審査は昨年同様に会場の密を避けるために人数制限がなされ、理事と運営委員による審査となりましたが、整然と行われ、結果的には偏りもなくバランスのいい審査になったと思います。こうした少人数審査は混乱もなくスムーズで、今後の審査のあり方を示唆しているように感じました。作品本位の審査で結果的には密度の高い作品が選ばれ、比較的若い人や新しい人の作品に秀作が見受けられました。また、本年は選挙改革委員会の提案による改革で役員委員の意識に変化が感じられ、逆境ともいえる情勢下で意欲的に参加している様子が窺えました。

絵画部 1階 第2室

絵画部 3階 第12室(U35奨励室)

絵画部 3階 第12室(U35奨励室)

絵画部 1階 第15室

絵画部 2階 第1室

会場入口



絵画部 審査会 2022年8月29日

第106回二科展 総括

生方純一

第106回展の特徴として、絵画部では会場構成を大幅に見直し、各部室に特徴を持たせました。受賞作や推薦作品をまとめて展示し、比較して鑑賞したり、初出品の選抜コーナーや小品の秀作室を設け、従来のU35コーナーなどと共に工夫をしました。彫刻部でも会場の中央に新しい試みとして募集した「新カテゴリー」作品を展示し、人気を集めていました。また、野外にも秀作が展示されましたが、鑑賞者の暑さに耐える様子が気になった日も多かったです。他には、4部の会員による小品のチャリティコーナーや、日本在住のウクライナの子供たちの作品も休憩室に展示しました。

会期の前半には中原常務理事による出品者支援講座・ワークショップがあり、「自分の「殻」を破り「描く」を10倍楽しくするために」と題して、楽しんで描くには何が大切かを語り、参加者がサインペンを使って一枚は手元を見ながら、もう一枚は手元を見ないで自画像を描くというユニークな発想で、表現の発見を実感するという講座を開催していただきました。

また、会期の後半には、昭和女子大学の特任教授である木下亮先生をお招きして、「写真を超えて」スペイン・リアリズム絵画との接点」と題した講演でスペイン美術の特徴であるリアリズムについて、17世紀のパロックから現代までの作品を取り上げながら、今日的な視点でスペインと日本人画家の接点を紹介いただきました。

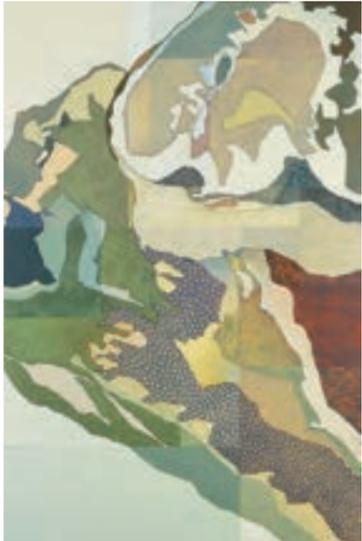


絵画部 2階 第1室

絵画部 2階 第1室

会場入口

第106回二科展 受賞作品 — 制作の視点



■東京都知事賞 *manière gravure* / 版画の手法 274.5×182.5



■内閣総理大臣賞 宇海の差値 172×260.6

東京都知事賞 谷口貞久

制作方法をよく質問されます。まず組み合わせたシナベニヤに不自由な線で下絵を描きます。その後彫刻刀で掘り、版画の技法を施します。版画の手法をいかにタブローにできるかという試みの制作なので、着色は油絵具で一気に行います。失敗すれば着色をイチからやり直します。刷らずに乾かしてタブローとして発表しています。

内閣総理大臣賞 田浦哲也

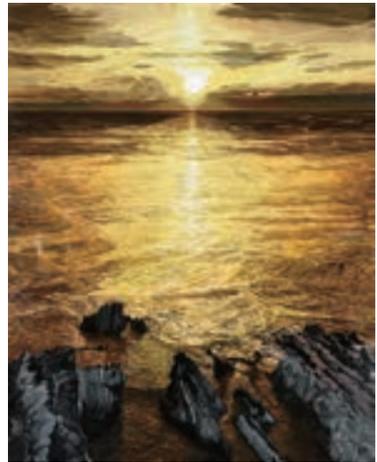
作品タイトルは「宇海の差値」と書いて、「うみのさち」と読む。青木繁の『海の幸』からイメージを飛ばした作品だ。海から上がって、進化をつづけてきた人類は、医学の進歩により、死を免れ、まるで死後を生きているような感覚に襲われる。このように人類は自然な成り行きを変更したり乗り越えてきたように思う。ところが、ふと見えない未来をのぞいてみたら、進化の過程の遠い過去の自分のしっぽが映っていた。そんな先行きの見えない不安な時代を描いた。



■SOMPO美術館賞 繁殖—新天地を求めて— F100 近藤 隆弘



■パリ賞 武蔵野の桜 F100 前川 普佐雄



■二科賞 夕風 F100 今泉 光治



■二科新人賞 心透 I F100 福岡ゆらり



■上野の森美術館奨励賞 生命 F100 塩川 晴美

第106回二科展 受賞作品

第106回二科展 審査・会場評

黒川 彰夫



審査風景

今年もコロナ禍のため、審査会場の人数制限があり昨年同様少人数の審査となりました。

理事長、常務理事、理事、監事、運営委員の計25名で行われました。まず会友の審査、次に一般の審査そして賞候補までを3日間で行い、4日目からは上記のメンバーに各支部長が加わり、密にならないようにバックヤードを使い最終の賞審査を行いました。

このシステムになって心配されたのは、審査に偏りが出るのではないかとということでしたが、昨年の結果を見てもその心配は無く作品本位で審査されていたと思えました。今回も作品本位で選考することは変わり

なく、入選、受賞作、と遜色の無い作品が選ばれたと思っております。

5日目は内閣総理大臣賞、東京都知事賞、会員賞に外部委嘱審査員2名と理事が審査に当たりました。内閣総理大臣賞の田浦哲也会員は、理想と現実との空間で彷徨う人間の心理をメカニク的な造形で表現し、落ちのある面白さがあります。東京都知事賞の谷口貞久会員はシナベニヤを組み合わせ、彩色した所に彫り込みを入れ面白い効果を出し、継ぎ目の変化を生かした動きのある形が織りなす美しい色の抽象です。

さて会場構成ですが、今回は何か気持ちの良い空間を感じました。それは、パーテーションの置き方により大きなスペースが取れたことからくるものだと思います。

1Fの1室は代表的なものとして最近注目されてきた作品が並び、2室、3室は重鎮の作品、以下独自の表現を追求する会員の作品が展示され、13室などは会員の

中でも新しい傾向の見られるものが並びました。14室は2点入選の作品が並び次期会員候補として大いに期待できるものであり、特に久田千恵子さんの視点の面白さと表現の柔らかさ、安新治さんの都会的センスなどに注目したい。15室では永田治子さんの水墨的表現が今後どう展開するか楽しみであります。

2Fは1室に入賞者が並び、中でも前川普佐雄さんの画面一杯に細密に描かれた桜は見事、坪田裕香さんの硝子の質感の表現、それぞれに次代を担う片鱗を見せています。

3F1室、SOMPO、上野の森美術館賞は近藤隆弘さんの生命力を感じさせる動き、塩川晴美さんの発想の面白さと透明感とそれぞれに色彩豊かな作品が選ばれました。9室に初入選、11室に2点入選を纏めたところは、見やすくなりスツキリとした展示になりました。12室U35の部屋は若い力が溢れ未熟ながらも良い作品が並びました。特に福岡ゆらりさんの白のモノトーンで描かれた作品の今後の展開に興味を持ちました。

第106回二科展 受賞者

内閣総理大臣賞 田浦 哲也 [福岡]
 文部科学大臣賞 山田 将 晴 [愛知]
 東京都知事賞 谷口 貞 久 [奈良]

(絵画部)

- 二科賞 今泉 光治 [神奈川]
 前川 普佐雄 [埼玉]
 SOMPO美術館賞 近藤 隆弘 [愛知]
 上野の森美術館奨励賞 塩川 晴美 [静岡]
 会員賞 有馬 広文 [鹿児島]
 石崎 瑠子 [千葉]
 及川 英之 [宮城]
 小出 和枝 [兵庫]
 徳永 スエ子 [愛知]
 会友賞 磯貝 文利 [愛知]
 大西 正昭 [福岡]
 菊川 ちひろ [山梨]
 黒川 隆行 [千葉]
 佐藤 幸光 [東京]
 島崎 紗柳 [京都]
 すぎもと 和 [愛知]
 竹原 洋 [神奈川]
 坪田 馨 [広島]
 中澤 裕香 [石川]
 田澤 純代 [神奈川]
 久田 千恵子 [愛知]
 平澤 紀久子 [京都]
 堀谷 莉恵 [熊本]
- 特選 飯藤 千智 [愛知]
 伊藤 裕茂 [岩手]
 井上 貴義 [福岡]
 上杉 芳美 [新潟]
 川田 憲美 [神奈川]
 亀路 美美 [富山]
 齋藤 照美 [栃木]
 島村 薫 [兵庫]
 須藤 美恵子 [大阪]
 鈴木 健一 [京都]
 竹中 美浪 [愛知]
 長門 春美 [埼玉]
 中村 月江 [東京]
 濱本 安紀子 [石川]
 林原 里美 [滋賀]
 藤山 弘美 [大阪]
 丸山 美 [大阪]
 宮崎 洋 [石川]
 三輪 修 [宮崎]
 村上 彦 [愛知]
 二科新人賞 福岡 ゆらり [愛知]
 新人奨励賞 岩清水 唯香 [青森]
 浦真斗花 [石川]
 大森 勇人 [静岡]
- 前田 喜久子 [東京]
 前橋 伸哉 [東京]
 森 千恵 [愛知]
 飯藤 千智 [愛知]
 伊藤 裕茂 [岩手]
 井上 貴義 [福岡]
 上杉 芳美 [新潟]
 川田 憲美 [神奈川]
 亀路 美美 [富山]
 齋藤 照美 [栃木]
 島村 薫 [兵庫]
 須藤 美恵子 [大阪]
 鈴木 健一 [京都]
 竹中 美浪 [愛知]
 長門 春美 [埼玉]
 中村 月江 [東京]
 濱本 安紀子 [石川]
 林原 里美 [滋賀]
 藤山 弘美 [大阪]
 丸山 美 [大阪]
 宮崎 洋 [石川]
 三輪 修 [宮崎]
 村上 彦 [愛知]
 二科新人賞 福岡 ゆらり [愛知]
 新人奨励賞 岩清水 唯香 [青森]
 浦真斗花 [石川]
 大森 勇人 [静岡]
- 加治木 成美 [京都]
 安川 久美子 [福岡]
 後藤 寿美子 [熊本]
 芝田 満江 [神奈川]
 筒井 通子 [奈良]
 鶴田 英輝 [福岡]
 富田 和子 [神奈川]
 中野 紀三朗 [山梨]
 星野 敦郎 [新潟]
 宮本 恵美子 [東京]
 柳井 吉治 [京都]
 色井 綾子 [京都]
 柳澤 綾子 [京都]

(彫刻部)

- 二科賞 該当者なし
 口一馬賞 林 一平 [石川]
 彫刻の森美術館奨励賞 吉田 夕力三 [沖縄]
 会員賞 該当者なし
 会友賞 篠木 玲子 [埼玉]
 角谷 豊明 [新潟]
 玉田 真理 [東京]
 浜田 修子 [東京]
 細田 愛由美 [島根]
 特選 宮川 晴香 [神奈川]
 会員推挙 浅草 義治 [愛知]
 勢智代 千葉 [和歌山]
 高橋 さち子 [愛知]
 田中 勢智代 [愛知]
 前川 普佐雄 [埼玉]
 森 泰秀 [佐賀]
 森 泰秀 [佐賀]
 矢島 初子 [東京]
 山本 知子 [東京]
 米村 保明 [熊本]



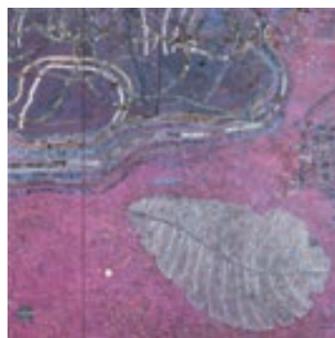
作品寸評—第106回展 受賞作品から



遊びの後 濱本安紀子



瞳 中村月江



季節の中で…還 長門春美

「ニュアンス」という言葉がはじめにうかんだ。どこもかしこもニュアンスが心にくい。味があるというんでしょうか。暗いけれどもあたたかい空間のなかに、L字形の朱色の色面が画面をつくっている。あちこちにちりばめられた遊び用具がファンタジーをさそふ。

(齋藤賢司)

濱本安紀子

暗いなかに、それよりも黒いケモノがこちらを上目づかいで、やわらかくにらんでいる。こわいものが、やさしいものに見えてくる。守ってくれる存在なのかもしれない。

(齋藤賢司)

中村月江

暖かみのあるパステル調ピンク色の大胆な絵画。点描画とカラージュを組み合わせて、色々な細かい工夫を凝らしている。大地に落ちていた大きな葉。その上の抽象的な公園の花壇を思わせる細かいマチエール。両方の大きさのギャップが効果的である。

(鶴岡義詮)

長門春美



油風 安川久美子



心透I 福岡ゆらり



NOVA 藤原弘美

ふしぎな雲、暗い高層ビル群、水面へのうつり込み、それらが上下対称、左右対称なのだが、うつり込み部分の描き方がおもしろいから単なる対称ではない。中央の天の岩戸がひろくような、たった数cmの明部が中心線をつくって、みごとに画面をささえている。

(齋藤賢司)

安川久美子

画面全体が白を基調にし、うつつら浮かび上がる色調が爽やかな優しい作品となっています。ユニークな画面構成で不思議な世界を生み出しています。また、若々しい新鮮な感覚での繊細な描写に好感が持てる作品です。これからのように発展していくのか次を見てみたいですね。

(米田整弘)

福岡ゆらり

画面を大らかに浮遊するフォルムが宇宙的な世界に誘い込みます。リズムカルな筆致が軽快で洒落たセンスを感じさせてくれます。フォルム、色彩など全体にすっきりと簡潔に表現され、作者が楽しみながら描いている気持ちが伝わってきました。

(米田整弘)

藤原弘美

作品寸評—第106回展 受賞作品から



月の雫 亀田憲子



Trip -birth- 及川寿美子



夢のあとに 伊藤 裕

柔らかな人物の肌と背景の固い石のような質感の対比が面白い。二人はまるで囚われの身でありながらも、背後に見えるブルーの空が、ここから抜け出せる希望の羽根をイメージさせる。

(鶴岡義詮)

亀田憲子

ほぼモノトーンの色調で構成されたインパクトのある作品です。大きなフォルムが不思議な空間を形成しています。独特な形は様々に想像を膨らませ、そこに生命の神秘やエネルギーも感じさせてくれました。今後の更なる発展を期待しています。

(米田整弘)

及川寿美子

大胆でインパクトのある、デフォルメされた人物のような黒いかたまり。盛り上がった白い川の流れの如し。マチエールの面白さも効果的に描かれている。

(鶴岡義詮)

伊藤 裕



予兆1 竹中美浪



STEPS-2 須佐美恵子



KITCHEN JUNK「わたしの世界」 齋藤照美

電信柱を下から見上げた面白い構図が成功している。三角形の奥行きと立体的、安定感もある。視線を変えるだけで、不思議な魅力的な絵に変化する。

(鶴岡義詮)

竹中美浪

まず、階段を大胆に捉えた構図が目立ちます。ブルーを基調に軽やかに描かれた静謐な画面。微かに塗られた黄色が温かみを添えていて詩的な空間を創出しています。独特な空気感が魅力的で心地よく伝わってきます。これからの展開が楽しみです。

(米田整弘)

須佐美恵子

一見、食器、金属、ガラスなどの光の描写が主題のように…だが、だまされてはいけない。床や背後の板の複製化したような技法、まるで板の上に描いたようでもびっくりした。おもわず画面をこつんとたたいてしまった。ごめんなさい。

(齋藤賢司)

齋藤照美



彫刻部 集合写真

コロナ禍の中、第106回二科展が9月7日から9月19日まで国立新美術館において開催された。残念ながら今回もオープニングセレモニー、テープカットなどは行われなかった。

彫刻部では、万全を期すべく予め体温測定をお願いし、送風機を持ち寄つての搬入・入落審査・受賞会議を行った。従来であれば搬入、展示、懇親会などで一般出品者との触れ合い、コミュニケーションが取れたがそれも叶わず、何か方法とを考え、初入选者には入館証と作品プレートに初入选シールを付け、会場で見かけた会員が積極的に話しかけることとなった。今回は一般出品者68名（初出品者30名）会友28名、会員52名での会場構成である。

出入り口の受付の後ろにあった壁面を外し、奥まで見渡せる広いスペースを形成した。二科ショップ、チャリテイコーナーを休憩室に移し、絵画部との間に壁面を設けたことにより、独立した空間を作ることが出来、

彫刻部 総評

島田紘一 氏

新しい会場構成となった。増員が見られた初出品作は、全スペースに偏り無く展示されている。それは受賞作品も同様である。また材質にも気を配り同じものが集まらないように計画され、どの作品も展示場所との違和感なく収まっていると感じた。

新設されたカテゴリー企画、30cm立方の中に収まる作品の応募をスタートさせた。35×35×110の美術館台座に21点の小品が二筋のカーブを描いて展示してある。大作とはまた違う小品の世界が始まった。どう進化し、膨らんでいくのか期待を込めて見守りたい。来年、出品してみたいという方に幾人かお会いした。台座についてはもう少し低い方が良いのではとの声が届いている。室内から休憩室の巡回展作品を観ながら野外展示場へ出ると、低かった木々がしっかりと緑のカーテンへと育ち、爽やかなスペースを作り出している。そこにはゆったりと作品達が点在している。

初出品者増、新しいカテゴリーと壁面構成、活気ある107回展を迎える準備は整ったと感じた。



彫刻部 会場

絵画部 新会員紹介

自然や物が変化していく、その時々々の美しさと感動を自分の感覚と融合させ、表現していきたいと思えます。



後藤 寿美子



朽ちる2

第101回 特選/第102回 会友推挙
第103回 会友賞/第106回 会員推挙

顔のようで顔じゃない人のようで人じゃないかたまり、エスキースも無い世界はいつもむずかしい……。



富秋 和子



えとらんぜ homme

第98回 特選/第99回 会友推挙
第102回 会友賞/第106回 会員推挙

現実のカタチから離れて想像を重ねていく。やがてモノクロと僅かな色彩の中で、画面は動き始める。



芝田 満江



PROMISE III

第88回 特選/第103回 会友推挙
第104回 会友賞/第106回 会員推挙

思春期真っ盛りの高二の娘が題材。ただ直向きに生きる多感な時期。想い描いた未来になれと強く願う。



星野 敦郎



仰向く

第79回 特選/第95回 会友推挙
第103回 会友賞/第106回 会員推挙

段々と抽象になった。以前の花鳥山水の先を求めた。単純な形の構成と色の抑揚を考えて一景を創つてみた。



邑井 吉治



成りゆく情景C

第85回 記念賞/第93回 会友推挙
第99回 会友賞/第106回 会員推挙



宮本 恵美子



擬態

壁面との対話をくり返しながら、次元を超えた描写に遭遇した時が忘れられず描き続けています。苦戦の中で挑戦し発見する喜びを楽しみに探し求めていきます。

第101回 特選/2017春季一科賞
第102回 会友推挙/第104回 会友賞
第106回 会員推挙



鶴田 英輝



珊瑚の化身(C)

色即是空空即是色二科会の歴史の重みを背負いながら、己に負けない絵の道を精進したく思います。己の力にあらず 今だ道なかば…… 合掌

第95回 記念賞/第98回 会友推挙
第99回 会友賞/第106回 会員推挙



筒井 通子



海の夢III

海の中に経験と心情や過去現在未来を創造して描くことに喜びを感じ、その時々々の偶然を楽しんでいます。

第102回 特選/2018春季一科賞
第103回 会友推挙/第104回 会友賞
第106回 会員推挙



中野 紀三朗



乳くびの上に蛙(III)

心の赴くままに色々と描き、その積み重ねから発想の転換をし、自己への挑戦が今回の作品になりました。

第72回 特選/第74回 会友推挙
第88回 会友賞/第106回 会員推挙



柳澤 綾子



夏来

「香りの記憶」がテーマです。感情を揺さぶる、心をざわつかせるものそんなものを描きたいと思えます。

第99回 特選/第102回 会友推挙
第103回 会友賞/第106回 会員推挙



特選 きみは crooked wood
宮川晴香



彫刻の森美術館奨励賞 作爲の境界
吉田タカコ



会友賞 ハミデル 浜田修子

第106回二科展 受賞作品 — 制作の視点



会友賞 見つめる 細田愛由美



ローマ賞 そして、これから 林 一平



文部科学大臣賞 地の記憶Ⅲ 山田 将晴

文部科学大臣賞 山田将晴
素材特性を活かして、生物の強い生命力、力強さを、折れてしまわないかと思うほど柔軟なカタチで、折れないであろうギリギリのところ、横方向に「すーっ」と伸びて行く様を思い制作しました。

ローマ賞 林 一平
コロナ禍。多くの方が絶望、危機に、また社会の変動に不安と閉塞感に戒められた。闇の中から見える希望という光のトンネルをずっと追いつけていた自分。しかし希望はしつかりと闇の中でも力強く輝いている事を改めて気づかされた。心の葛藤をテーマに。

会友賞 細田愛由美
八年前、モデルだった家族の猫が旅立ってからは身近な人をモデルに制作をしています。
自然に囲まれた田舎での生活で、自分もその一部であると思う時、ありがたいという気持ちが生れます。今を重ねて、感謝や感動を形にしたいと思っています。

会友賞 浜田修子
美術の世界から離れ、気が付けば二十五年が過ぎていました。後先考えず彫刻の世界に復帰しても、思うように出来ずもどかしい日々が続く。今は彫刻を作る事に感謝し、「かたち」と「色」を組み合わせた私なりの表現が出来ればと思っています。

受賞作品寸評

彫刻の森美術館奨励賞 吉田タカコ
鉄の薄板で構成されたフォルムは圧巻で、鋤跡やタツソ溶接にも作者の美意識を感じる。タイトルの示す通り、作品制作は常に作爲の境界との闘ぎ合いである。自身の境界の捉え方も変容して行く事と思うが、どのような形で実を結ぶのか、今後の動向に注目である。
(長谷川 登)

特選 宮川晴香
圧倒されるような巨樹と出会った作者は怯むことなくそのたたずまいを見つめて鑿を当てながら対話する。無造作に伐採された原木はやがて一つの意思を持ってしなやかな形状を現した。
作者がこの大木に向かつて制作している姿を想うと、豊かな気持ちになりました。
(安田 正子)



会友賞 Try on. ~試着しよ~
玉田真理



会友賞 同床異夢 篠木玲子



会友賞 snow dome 角谷豊明

会友賞 玉田真理

「試着する」という意味の英単語、Try on(トライオン)からの、トラとライオンの掛詞です。
いつもと違う自分になれると、ちょっとドキドキしながらライオンを着ているところです。この後きつとお互い交代で試着していると思います。

会友賞 篠木玲子
学生時代からグラフィックデザインをやっていました。55才になった時、立体制作に強く惹かれて、早20年。毎年新しい事にチャレンジ、チャレンジと思いながら作り続けて、今回の受賞。
作品は、サナギから蝶に脱皮する時の未知へ飛び立つ不安と勇気と憧れを表現しました。これから増々挑戦していきたいと思っています。

会友賞 角谷豊明
豪雪地帯に住んでいる者として雪は生活の一部。
厳しい冬を日々我慢強く暮らしていると降雪後に力強く、美しい白銀の世界が現れる。
今回は豪雪地の風景を切り取り、雪の降り積もった建築物をモチーフに雪国の一コマを表現しました。

彫刻部 新会員紹介



浅草 義治



荻野 弘一



澤田 志功

オリンピック選手の言葉に決して諦めなければ夢は叶うと言った人がいます。初出品から46回目、73歳で会員推挙、夢のようです。これからも熱い鉄と対話しながら自分の個性を活かし密度の高い仕事をしていきたいと思っています。
第78回特選/第82回 会友推挙
第101回 会友賞/第106回 会員推挙

多くの方々にお世話になり励まされ会員に推挙されるまで出品し続けられたことに率直に皆さんの御厚情に感謝です。二科会会員に推挙されて何か心構えが変わるかと言えはそれはないでしょう。これまでと変わらさず石と向き合い語り合い、彫り発表し続けるのみです。
第101回 特選/第102回 会友推挙
第104回 会友賞/第106回 会員推挙

制作に使用している楠という素材には、それ自体に「生命」が宿っている為なのか「曖昧さ」と「リアリティ」を同時に表現するのに適していると強く感じています。
そんな事を考えながら密度の高い表現を全ての作品に託したいと思っています。
第103回 彫刻の森美術館奨励賞
第104回 会友推挙/第105回 会友賞
第106回 会員推挙



吉田 朋世

歴々の彫刻家が「自らの花を咲かせるように」と後進に語ったように、私は彫刻とは何か、芸術とは何か」という大きな問いを持ちながら、自らの意志を表現するような作家でありたいと思っています。
第98回 特選
第99回 特選・会友推挙
第102回 会友賞/第106回 会員推挙



新カテゴリー作品

チャリティの愛、思いやりの言葉が並びその語源は古代ギリシャ語で「親切」を意味していました。そして藝術という言葉には「心に種をまく」という意味が含まれています。社会的救済活動と来場者・アーティストへの親切とは何かを、時間をかけて議論した結果、芽を育てるよう継続できる環境を作ることが必要だと考えに至りました。

新たな取組みとして、来場者には作品との出合いのワクワクを提供し種をまき、作家には従来方式に加え還元方式を導入し、制作費の一部を還元することにより作家が育つ糧としました。

さらに政府の推奨する電子マネー決済を二科展として導入し、国立新美術館では公募展初の採用としたことで、誰においても安全で「親切」な循環システムを構築しました。

「ワクワクの種」として取入れた「ART CUBE」

のアクリルケース15cmの立方体は、見る側の意識を集中させ作品の力を空間に集約しました。会場ではケース越しに光を受け輝く作品や、そのままの形で静かに語りかける作品からは、大作では見ることの出来ない繊細な手仕事や遊び心を感じ、出品者の学びの場となる特別な空間になりました。また2年越しの開催となったことから、チャリティ参加の意義が彫刻部に浸透し、30点の作品を提供いただくことができたことでも、新しい始まりの風を感じています。

美術館と一丸になって進めた電子マネー決済では、一人で10点購入された来場者もあり、ワクワクを体験することができました。物販・チャリティにおいてクレジット利用が50%と好調で、QRコード決済によるチケット販売も今後増える見通しが立ち、新たな取組みの成果を実感しています。



絵画部、彫刻部 会員によるチャリティー展示

野外展示場から見たチャリティーショップ

【特別作品展示】

■今、子どもたちに出来ること

■祈りを込めて

—故郷を離れ日本に住むウクライナの方々の作品—

後援：ウクライナ大使館



ウクライナ子供達の作品

寄付活動費
NHK厚生文化事業団…
200,000円
日本ウクライナ友好協会…
200,000円
芸術支援活動費
ウクライナ作品展示経費…
558,000円

1階の会場内にあった二科ショップが、今年は休憩室に移り、彫刻部の野外展示場へ続く外光の入る明るい空間で、開放感溢れる展示が出来ました。来場者の方々もゆっくり鑑賞できたと思います。絵画部の額装作品、彫刻部の石、木、土、石膏、金属などさまざまな材質による作品、アートキューブなど新たな企画も加えチャリティコーナーはさらに充実した成果を上げることが出来ました。今年から導入した電子決済によって売り上げも順調でした。

売上総額1,405,900円から経費206,620円の支出を計上し、今後のチャリティ活動を継続するための準備金として447,900円をチャリティ基金として計上させていただきます。

下記の通り公益社団法人二科会としてチャリティ販売の収益の内、寄付と芸術支援活動ができましたことを報告いたします。

「アート」の芽を育てる新たな取組み」 山田美智子

チャリティの愛、思いやりの言葉が並びその語源は古代ギリシャ語で「親切」を意味していました。そして藝術という言葉には「心に種をまく」という意味が含まれています。社会的救済活動と来場者・アーティストへの親切とは何かを、時間をかけて議論した結果、芽を育てるよう継続できる環境を作ることが必要だと考えに至りました。

新たな取組みとして、来場者には作品との出合いのワクワクを提供し種をまき、作家には従来方式に加え還元方式を導入し、制作費の一部を還元することにより作家が育つ糧としました。

さらに政府の推奨する電子マネー決済を二科展として導入し、国立新美術館では公募展初の採用としたことで、誰においても安全で「親切」な循環システムを構築しました。

「ワクワクの種」として取入れた「ART CUBE」

◆二科ショップ・チャリティー報告

1階の会場内にあった二科ショップが、今年は休憩室に移り、彫刻部の野外展示場へ続く外光の入る明るい空間で、開放感溢れる展示が出来ました。来場者の方々もゆっくり鑑賞できたと思います。絵画部の額装作品、彫刻部の石、木、土、石膏、金属などさまざまな材質による作品、アートキューブなど新たな企画も加えチャリティコーナーはさらに充実した成果を上げることが出来ました。今年から導入した電子決済によって売り上げも順調でした。



9月7日 授賞式 14:00~ 3階講堂



生方理事長 総評



内閣総理大臣賞 田浦 哲也



9月9日 支援講座・ワークショップ 13:00~ 3階講堂

第106回二科展 支援講座・ワークショップ参加者募集[先着70名]

◎生方純一理事長が語る
「二科・昨日、今日、明日、そしてその先」
常に時代の先を読み取ってきた二科展ですが、時代の変化には驚きものがあります。こんな状況とした時代において、二科展の目指していく道は、公益社団法人として国内での美術館は勿論、世界への文化交流なども視野に入れた活動などが望まれています。

◎中原史雄 支援講座・ワークショップ
自分の「殻」を破り「強く」を10倍楽しくするために
強に頼まれるわけではなく、強を積み重ねている。だから「ワクワク」しなれば意味がない。長年二科展に出品してきた経験をもとにまずはあなたのリフレッシュ。そしてインパクトのある作品を楽しんで強くは別が大切か語ります。ワークショップ「これ私です」。



中原史雄 支援講座

9月16日 講演会 14:00~15:30 3階講堂

木下 亮氏(昭和女子大学特任教授)

写実を超えて ～スペイン・リアリズム 絵画との接点～

スペイン美術の特徴であるリアリズムについて17世紀のバロックから現代までの作品を取り上げながら、今日的な視点から考えていきます。さらにスペインと日本人画家との接点についても紹介します。



ワークショップ

2023春季二科展 予告

2023リニューアル春季展への誘い 展覧会担当理事・春季展展示委員会 山中 宣明

2023年の春季展は、東京都美術館の1Fに1.5倍に増床し、期間も2週間となって2回目の開催となります。国立新美術館での本展とは違った二科展の魅力を打ち出すべく、2つの柱を趣旨とし、絵画・彫刻とも新企画を検討・準備しています。

① 会員の実験的な表現の場とすること

● フリースペースの設置 ワクワク感を大切に

会員の規定サイズの力作群に加え、素材・表現方法・展示法などを自由に展示するスペースも設けました。前回は理事中心でしたが今年は広く会員にも参加を募り、十数名の会員の意欲作が展示されます。彫刻部も参加予定でコラボ的空間もどうぞご期待。

② 本展とは違う視点・企画で一般・会友の奨励・育成の場とする

● 一般・会友選抜展

絵画部の第106回二科展の受賞者、会友推挙者から56名を選抜し、F130号までの大作にもチャレンジした新作を1~3室に展示します。優秀作には春季二科賞・春季賞も授与。ギャラリートークも実施。彫刻部も期待の会友・一般から12名選抜。

● 個展形式特別展示「7つの個」

絵画部一般・会友の近年の特別賞受賞者から今回は7名を最終選抜し、一人約10mの壁面に個展形式で自由に展示。7人の侍のそれぞれの個性のセッションとなる企画。選抜作家の世界を語るトークも予定

選抜者：小原 禎二[神奈川] 島中 富雄[大阪] 中澤 純代[神奈川] 前川 普佐雄[埼玉] 今泉 光治[神奈川] 近藤 隆弘[愛知] 塩川 晴美[静岡]

● 春季展開催中の支援講座・ワークショップ

午前の部：田川絵理 支援講座

「私の無手勝流手前みそ制作」
——デッサンがバラバラになる契機はジャズピアノだった?!



田川絵理

午後の部：西 健吉 支援講座・ワークショップ

「自分らしい創作活動の取り組み方について」
絵画制作を通して新しく自分を発見するポイントや基礎的な要素について語る。
ワークショップ「見なくても描けるもの」物の性質の理解と構成について説明しながら体験する

西 健吉

日時：2023年4月29日(土) 午前の部：午前10時~(90分) 午後の部：13時~(120分)
場所：東京都美術館 講堂 定員：各90名 参加費：3,000円

● 初めての試みとして相互研鑽の会員勉強会を開催予定

4月20日(木) 午前 生方純一「107回二科展に向けて」
山中宣明「素材との対話・その可能性」
午後 中原史雄「一歩踏み出す表現には何が」
講座後 参加会員による懇談

各会員が支部や教室・学校などで実施している出品者への有効な指導法や教材等の情報交換の場とし、作家として絵画表現の取り組み方や会にとって今必要な事を話し合う機会を設けます。

新たな春季展として広く美術界に発信していきますので、ぜひ会場に足を運び新たな息吹を体感していただきたいと思います。



フリースペース



彫刻部展示室



2022春季二科賞 加藤弘子



個展ブース



講演会(2022年)

支援講座・ワークショップ

応募申込書はこちらから→

FAX: 03-3354-4768

メール: nika@nika.or.jp



2023春季二科展 選抜出品予定者

<p>■ 彫刻部</p> <p>(会友)</p> <p>角谷 豊明[新潟] 細田 愛由美[島根] 篠木 玲子[埼玉] 浜田 修子[東京] 玉田 真理[東京]</p> <p>(一般)</p> <p>宮川 晴香[神奈川] 吉田 夕力[沖縄]</p>	<p>■ 絵画部</p> <p>(会友)</p> <p>前田 喜久子[東京] 平澤 紀久子[京都] 磯貝 文利[愛知] すぎもと 和[愛知] 森 千恵[愛知] 竹川 洋子[神奈川] 菊島 ちひろ[山梨] 木村 隆行[愛知] 久田 千恵子[愛知] 黒川 壽子[千葉] 佐藤 幸光[東京] 大西 正昭[福岡] 島崎 紗柳[京都] 中澤 純代[神奈川] 相原 俊幸[神奈川] 嵐 蒼樹[石川] 有澤 英子[石川] 大 正子[茨城] 川島 正 熊本 桑子 純子[愛知] 志波 宏子[和歌山] 高橋 さち[千葉] 田中 勢智代[愛知] 宮田 春奈[石川] 森 泰秀[佐賀] 山本 知子[鳥取]</p> <p>(一般)</p> <p>飯干 智子[愛知] 伊藤 茂[若手] 伊藤 裕[愛知] 井上 貴義[福岡] 上杉 昭芳[新潟] 及川 寿美子[宮城] 亀田 憲子[神奈川] 川路 聡美[富山] 齋藤 照美[栃木] 島村 薫[兵庫] 竹中 美浪[愛知] 長門 春美[埼玉] 中村 月江[東京] 野口 晃[東京] 濱本 安紀子[石川] 林 里美[滋賀] 春木 凛[大阪] 福岡 ゆり[愛知] 藤原 弘美[大阪] 丸山 良二郎[鹿児島] 宮崎 洋子[石川] 三輪 修[宮崎] 村上 元彦[愛知]</p>
--	--

第106回二科展 巡回展スケジュール

◇ 大阪展	令和4年11月3日~11月13日	尼崎市総合文化センター
◇ 東海展	令和4年12月21日~12月25日	愛知県美術館ギャラリー
◇ 京都展	令和5年1月24日~1月29日	京都市京セラ美術館
◇ 広島展	令和5年2月7日~2月12日	広島県立美術館 県民ギャラリー
◇ 鹿児島展	令和5年3月5日~3月12日	鹿児島県歴史・美術センター黎明館
◇ 福岡展	令和5年3月14日~3月19日	福岡市美術館



大阪巡回展 会場

地域展 二科展出品者支援

◆ 地域支援 一支援担当理事が会場講評会など各地の出品の方々を支援します

北海道支部展	令和5年5月9日~14日	大丸藤井セントラルノーザンギャラリー	5月8日 講評会(予定)
愛媛支部展	令和5年5月17日~21日	松山県立美術館	5月20日 講評と四国地域懇談会(予定)
東北連合展	令和5年5月26日~30日	秋田県立美術館	会期中 レクチャーを予定



東北連合展会場 (2022年)

◆ 地域展の役割——関西二科展 2023年4月11日~16日 京都市京セラ美術館

関西2府4県(滋賀・京都・奈良・大阪・和歌山・兵庫)で行われている関西二科展について紹介します。

● 1966年 第50回二科展が終わった翌年、第1回関西二科展が大坂高島屋百貨店で、第2回展は大坂大丸百貨店での開催、第3回展から京都市美術館(現・京都市京セラ美術館)で毎年開催されるようになりまし。発足当時の絵画部会員は藤井二郎、松井正、吉原治良、伊庭伝治郎、井上寛造、松葉清吾、吉村勲、猪田七郎、田川覚三、大淵陽一、辻本敬三、福島淳志郎、赤羽恒夫、彫刻部では大西金次郎、日高正法、平川正道、松下隆治、長谷川雅司、村岡三郎、木村敏小山由寿、東山正久、平野秀一で、関西在住の二科会会員・会友および二科展出品者(前年までの入選者)で今年二科に出品する者)による展覧会で、とくに新人に対して広く研鑽の場を提供しようとの試みで始まりまし。

当時の絵画で二科展入選者は50名余だったのが、2、3年後には120名余りになって大作もOK、100号2点も出品できる場として強制のない刺激を受けながら現在の会員・会友にながっているものと思います(現在は会員・会友も増え、壁面の都合上、会員だけは30号程度との制限があります)。

地域展の役割 京滋支部・理事 田川絵理

関西二科展が語って下さった「関西二科展の成り立ち」から個人的思いが湧いてとまりません。本展に入選すれば次の関西二科展に出品する事ができる!しかも号数制限無し!!

本展に100号1点出品するにも50号2点とセットにする縛りがあった時代のことですから、まずは100号を鑑別無く陳列してもらえ喜び!はじめて200号を制作したのも関西二科展でした。

制作の自由と個性の尊重、まさに強制のない刺激をうけながらインキュベーター彫刻器として緩やかに存在してました。

関西二科展で受賞しては本展の賞につながって:ほとんどの関西会員会友がたは振り返れば気付かぬ裡にもこの経過を辿ったのではないかと思います。

いま、ひろく研鑽の場を提供、するべき側の立場となつて参加作品サイズこそ30号程度、会員として後進に壁面を提供してはおりませんが、インキュベーターとして存在できているか、観るけれどもあれこれ指示したり口を挟まない達人にとうてい成れていないことを反省します。

団体展は絵を発表するところであり絵を教える処ではない、と先達の言葉、改めて肝に銘じなければと思います。

関西二科展について 関西支部長・理事 尾崎 功

二〇二三年九月二十三日逝去
享年86歳

略歴
一九八一年 第66回展
一九八三年 第68回展
一九九九年 第84回展

日本美術協会賞
日本美術協会友推挙
日本美術協会友賞

高柳 博氏

絵画部会友

一般の出品規約は
下記のQRコードから
ダウンロードできます

彫刻部 

絵画部 

二科会 Instagram

二科会公式インスタグラムでは

- ・会期中の会場風景
- ・受賞者インタビュー など、二科展の様々なシーンを発信しています



ART.NIHA.NIHATEN

帝国ホテル二科サロン

帝国ホテル二科サロンにおいて第106回二科展受賞者を中心に小品展を開催しています。

・会場 帝国ホテルインペリアルタワー・ギャラリー
〔入場無料〕

2023年
第1期(1月10日)〜4月4日

田浦哲也 石崎瑠子
筒井通子 星野敦郎
宮本恵美子 前田喜久子
森 千恵 木村隆行
相原俊幸 上原 淳
志波宏子 宮田春奈

第2期(4月4日)〜7月4日

小出和枝 有馬広文
鶴田英輝 平澤紀久子
竹川洋子 久田千恵子
大西正昭 嵐 蒼樹
大吉正子 高橋さち
森 泰秀 山本知子

第3期(7月4日)〜10月3日

及川英之 後藤寿美子
富秋和子 邑井吉治
磯貝文利 黒川壽子
島崎紗柳 有澤英子
川島 正 田中勢智代
森山麗子 米村保明

第4期(10月3日)〜1月9日

徳永スエ子 芝田満江
中野紀三朗 柳澤綾子
すぎもと和 菊島ちひろ
佐藤幸光 坪田裕香
石見香賀里 桑子純子
前川普佐雄 矢鳥初子

第106回二科展 概要

表2

搬入点数	106回展(昨年比)
絵画・一般	1,837点 (104減)
絵画・会友	710点 (79減)
彫刻・一般	81点 (33増)
彫刻・会友	28点 (5増)
合計	2,656点 (145減)

表1

	入場者 (前年比)
一般当日	2,909人 (774増)
前売り券入場	2,730人 (1,212増)
高校・大学	382人 (58増)
チラシ割引	252人 (21減)
チケットぴあ	0人 (±0)
団体割引	49人 (49増)
企画割引	93人 (68増)
新聞社優待券	283人 (66増)
有料入場者	6,698人 (2,206増)
無料入場者	45,563人 (17,279増)
入場者合計	52,261人 (19,485増)

表3 (ウクライナ特別展示を除く)

展示 (遺作含む)	人数(前年比)	点数(前年比)	35才以下 出品者数(前年比)	
			応募	在籍数(前年比)
絵画・一般	699名 (43増)	762点 (49増)	48名 (10増)	48名 (10増)
絵画・会友	214名 (1増)	277点 (21増)	6名 (1減)	7名 (±0)
絵画・会員	170名 (6増)	170点 (6増)	-	-
彫刻・一般	63名 (22増)	66点 (21増)	21名 (8増)	21名 (8増)
彫刻・会友	28名 (6増)	28点 (5増)	1名 (1増)	1名 (1増)
彫刻・会員	52名 (4増)	70点 (14増)	-	-
展示合計	1,226名 (82増)	1,373点 (116増)	76名 (18増)	77名 (19増)

2023春季二科展
2023年4月19日〜5月2日
東京都美術館



令和四年十一月三十日発行

公益社団法人 二科会

〒160-0022 東京都新宿区新宿4-1-15
レイフラット新宿501号室

電話 03-3354-6646
FAX 03-3354-7688

- 編集委員
- 委員長(総) 深見まさ子
委員(総) 寺田 眞
" " " 渡辺 俊文字
" " " 酒井 とし子
(彫) " " 山口 博
" " " 上田 快

「思い切った刷新を！あな
たらしいスタイルで！」とい
う言葉を背に、当面は今ま
でのスタイルを継承しつつ
編集したいと思っています。
1979年6月、第1号が
会員向けの機関紙としてス
タート致しました。それ以
降の先輩諸氏が築いてきた
二科会の重みを感じながら、
運営の見える化を図りつ
つ、二科展開催の報告を兼
ねた紙面、更には会員、会
友、一般出品者の制作の言
葉が伝わるべく掲載を志し
て参りたいと思っております。
今後、皆様から忌憚のない
御意見をいただきながら編
集に関わってまいります。
ご寄稿いただきました会員
の皆様、受賞者の皆様あり
がとうございました。今号
表紙は爽やかなイメージを
狙ってみました。ここに第
79号をお届け致します。
(深見)

事務局だより

第106回二科展では、国立
新美術館公募団体でも初と
なるキャッシュレス化を導
入。これにより、カード決
済やスマホアプリでの支払
いが可能となった。チャリ
ティーコーナーでは彫刻の
小作品を何点もご購入され
た方等がおられ。導入の
成果が得られた事は、その
プロセスに努力をしてきた
山田会員をはじめ、初の試
みに携わってきたスタッフ
の喜びは一入であった。

二科会は数年間に渡り
ウクライナとの交流を行っ
てきた。今年の事業計画で
は外交30年による交流展示
を予定。しかし、七月の声
を聞いてもウクライナ大使
館と連絡が取れない状況
であり、二科会は交流展示
を中止または延期すること
としたが、ウクライナへ芸
術支援で何かできないか、
チャリティーを行いたい、
との声が理事会で取り上げ
られ、日本に避難するウク
ライナの子供たちに「今、
子供たちにできること」コ
ーナーと「祈りを込めて」の
コーナーが実現。会場では
出品したウクライナの子供
たちや、日本在住の方々の
笑顔を見ることができ
たのが何よりであった。

美術団体として芸術を通
して会員の気持ちを集約
できるような義援活動をこ
れからも続けていけたらと
思う。

事務局長 塙珠世

編集後記

106回二科展は、ウイルス
問題や世界不安の中多くの
制限と工夫をしながら、新
しい試みを積極的に取り入
れ、二科会の方向性を示唆
した展覧会になりました。
コロナ禍は私たち二科会に
も大きな変化を齎し、各委
員会も、リモート会議を主
流に考えるようになり、社
会の変化と共に、二科会の
変革も始まってきたという
状況です。こうした中、前
編集長から引き継ぎを頂き
ながら、ようやく発刊に至
りました。